



趙寿玉先生の作品「五方舞」の音楽を担当され、また今年6月に開催された「町田子ども劇場」では楽器演奏と「韓国のリズムと打楽器について」の解説をして下さった李昌燮（イ・チャン・ソプ）先生にお話を伺いました。尚インタビューは7月に行われました。

李昌燮先生は広島県のご出身とお伺いしましたが、どのようにお過ごしでしたか。

■両親とも広島島の出身で僕は在日3世です。若い頃はプロのギタリストになりたいと思っていました。ブルース、黒人音楽が大好き

もっと上手になりたい。もっと深く入り込みたい。

でした。その頃地元友人が韓国に留学に行きその傍らチャンゴも習って帰ってきたんです。彼の音を聞いた途端身体に電気が走った様な衝撃を受けて即座に「僕はこれをやるんだ」と決めました。そして一年後には韓国に渡って来ました。若かったですね、僕が25歳の時でした。

それでサムルノリ創始者のメンバーの内の一人である李光壽（イ・グァン・ス）先生の元へ向かわれたのですね。

■その頃の僕は韓国語も出来ないしネットも無い時代ですから何処に行ったら先生に会えるのかも分かりませんでした。やっと探し当てて住み込みでの修業を許して頂きました。先生の身の回りのお世話をしながらの稽古が始まりましたが、演奏方法なんて一切教えて貰えません。「昔式」の修業、見て覚えるんです。「チャンゴ、ブク、

チンを覚えてからケンガリを打つ人が本物、ケンガリだけ打つ人は偽物」「ケンガリを打つ意味はどこにある？」。大事なことを色々伝えてくださ

いました。でも決して順風満帆ではありませんでした、途中で投げ出したくなった時は何度もありましたよ。

李昌燮先生にとつて李光壽先生とはどのような存在ですか？

■先生は小さい頃から本当に才能があったようで6歳から男寺党（ナムサダン）で全国を回っていました。各地の伝統芸人との交流で様々な技術を身につけられた方ができたり、されること全てが別格だと感じます。僕にとつて先生は本当に「先生」です。全ての面で先生です。もう絶対的な人です。先生に出会ってない人生を思うと恐ろしくなります。修業の中で先生は「芸人になりたければその前に人間になれ」と言い続けました。演奏のテクニクは教えてくれませんが人としての生き方は教わりました。今でも先生の目の

前の演奏はとて怖い、たくさんの観客より先生一人の方が緊張します。師匠のいる人はみんなそうじゃないんですか。

■拠点日本に移されてから趙寿玉先生とお知り合いになり「五方舞」の音楽を手掛けてくださいましたね。

■その頃の僕はサムルノリの演奏以外の知識は持って無くて最初にお話を頂いた時「僕には無理です」

ます。8月22日の公演はチュムパンの皆さんにゲストでお越し頂きますが僕にとつても特別な気持ちです、音楽を手掛けた五方舞の舞台です。踊り手と演奏家、心をひとつにして思いを分かち合いたいと思っています。

李昌燮先生の伝統に対する思いを聞かせてください

■僕は伝統を始めて20年です。韓国では30年続けて初めて一人前になれるかどうか分かんと言われま

す。僕は凄く上手になりたい、もの凄く。そしてもっと深く入り込みたい。まだまだ全然足りてないと思う。それは僕にとつて先生の存在がとて大きいから。死ぬまでに少しは先生に近づきたいと思っています、死んでも追いつないですけれども。何千人の前で演奏したとか、TVに出て有名になるとかそんなことには全然興味が

ないんです。それより先生が真剣にチャンゴを打つてるその姿を傍で見ていたい。僕が韓国に移り住んで活動しなかったのは自分の役割は日本にあると思ったから。日本で活動していると、先生が僕に「チャンゴを人に教えない」と言ってくれました。教えるということとは自分が2倍習うことになるからと。自分に学びや発見が無いと感じる時は「何かが間違っている」と思う。ではどうすれば自身も学べるのかと考える。先生はいつも僕の後ろにいてずっと僕を見守ってくれていると感じています。（聞き手、金子容子・編集委員）

です。8月22日の公演はチュムパンの皆さんにゲストでお越し頂きますが僕にとつても特別な気持ちです、音楽を手掛けた五方舞の舞台です。踊り手と演奏家、心をひとつにして思いを分かち合いたいと思っています。

韓国扶安ワークショップに参加して

趙 昌代

スケジュールを調節して行つて参りました。韓国扶安2泊3日、ミンサルプリワークショップ。日程は、夏真っ盛りの8月7日〜9日。前日の8月6日の午後、金浦空港で現地集合した寿玉先生、宮崎オンニ、私の3人は、翌日どうやって現地入りしようか思案していたところ、他の参加者の方が、一緒に車に乗せてくださるといふ吉報をうけて、ひとまず安心。ようやく楽しめると、夕食はイタリ

アンを食べ、慶福宮近くにあるゲストハウスの周りを散策し、軽くショッピング、快適な部屋で、翌日に備え、感謝しながら眠りに就きました。

7日早朝、待ち合わせ場所までついていると、一人また一人と、昨年夏のワークショップでお会いした懐かしい面々が。冬にもワークショップは行われましたが、私は参加してないので1年ぶりの再会です。え、いったい、何人で行くの？

私たち、スニーカーも

あるのに、みんな車に乗れるの？と心配していると、結局10人乗りのワゴン車が登場して、心配は解消。外国では、やはり意思の疎通が難しい。それでも、私達3人を含めた9人と、荷物がやっと入り、ぎゅうぎゅう詰めです。

扶安は、全羅北道にある小さな町で、ソウルの高速バスターミナルから3時間20分。近くには、辺山半島国立公園や、来鮮寺などの観光地も近いようですが、今回はもちろんすべてスルー。

車中はすっかり旅行気分、皆が持ち寄ったお



やつを回しあつたり、ドライブインで休憩して、飲み物買つたり、もつぱらお昼をどこで食べるかという話で盛り上っていました。途中の群山に、有名な海鮮チャンポンの店があるとの事で、高速を一度降りて立ち寄ったのですが、50人くらいの列が出来ていて、残念ながら断念。それならば、鮮魚焼きを食べようということになり、日本という干物韓定食で腹ごしらえをし、一路ワークショップ会場に向かいました。



のんびり旅を楽しんでしまったので、13時の集合時間を少し過ぎるの到着になりましたが、ここで、ちょうど韓国留学中のゆげちゃんも合流。どこぞで、サムルのワークショップを終えてから、一人で駆け付けたとの事でした。ご立派。今回の会場の扶安無形文化財伝授館は、ここ最近建てられた真新しい広々とした建物で、向かって正面左側に、舞台と鏡が備えられた練習場、正面右側には無形文化財展示館があり、大きな一本松の生えている芝生の庭をぐるりと囲むように建物が配置されています。

左側に4部屋の宿舎とお風呂、トイレ、右手前には食堂、手前に広い駐車場という作りで、風の通りが良く、あんなに暑かった東京やソウルとは雲泥の差で、涼しく過ごしやすい場所でした。

地元でエジヨ工房という素敵なショップを営まれている張蓮子さんが、朝昼夕と、自分で育てたり、山で採ってきた野菜で食事をつくつてくださり、プレートにいろいろな野菜を毎回美味しくいただきます。蓮子さんの料理は、何を食べてもおいしく、まさに全羅道の味を、宿舎で満喫出来ました。

蓮子さんは、普段は、布を染めたり、洋服やバックなどの小物を作つたりしておられるそうです。素朴で素敵だったので、思わず、私と寿玉先生は、麻の手染めスカーフ、買っちゃいました。

肝心のミンサルプリワークショップですが、今回は、昨年の夏と比べて、参加者は20人弱。広い練習場だったので、金ミンソン先生も

よく見れ、前回参加した時は、順番覚えるだけで精一杯でしたが、今回は、微妙なニュアンスも少し解説できたように思います。

ミンサルプリのミンは何も持たない素手と言う意味らしいです。練習中、作りすぎず自然にという言葉を何度も聞きました。体が向く方向に、自然に手足がついてきてその人の形となり、それで内面の何かを人に伝えていく。奥が深い踊りです。ますます、ミンサルプリが好きになりました。趙甲女(チョガムニョ)先生がお亡くなりになられたのが残念です。一度だけでも、生で拝見してみたかったなと思います。

日常の雑踏からかけ離れ、食べべて、稽古して、寝て、踊りの事だけ考えて、幸せなひと時でした。これからも、1年に1度は、こんな贅沢な時間を過ごしながら、自分の踊りを育み、精進していきたいと思つた旅でした。

最後に、一緒に楽しんだ宮崎オンニ、ゆげちゃん、このような機会を作つてくださり、一緒に参加して下さった趙寿玉先生、熱心に指導いただいた金ミンソン先生、全ての準備をして下さった韓国のオンニ達、愛のこもった食事を作ってくれた蓮子さん、今回知り会えたすべての人たちに感謝して。

(チョウ・チャンデ・土曜日クラス)

辿り着いたらチュム

石塚 多美子

私と韓国舞踊との出会いを語るには、そこに行くまでの経緯をまず語らなくてはいけないでしょう。

1988年8月、私は北京にいました。大学を卒業して初めてついた仕事は、日本で日本語学校を立ち上げて、中国の人たちに日本語を教えることでした。戦中、満州で暮らしていた母たち一家は、引き揚げの時に大変な苦労をしたのですが、そういう母たち一家を支えてくれた中国人の話をずっと聞いていた私にとって、それは、一種の恩返しのような思いから選んだ仕事でした。その立ち上げの準備をし、第一期生となる学生たちのビザの申請までの手続きをして、日本の政府から専門学校との認定を受けるまでの間、私は中国人とのコミュニケーション力をアツプするために、そして何よりも母が幼い時に暮らしていた思い出深い中国大陸に渡って語学を学ぶことを決めたのです。

北京外国語学院での生活が始まりました。そこで私は、当時のパスポートに渡航できない国として記載されていた国の方と出会いました。それは北朝鮮の学生たちでした。この得がたい機会を逃すまいと、私は、すぐに彼らに近づいていき、朝鮮語を習い始めました。そのうちに、中国の少林寺拳法を

習っていた私に、それより君にはテコンドが似合っていると、テコンドまで教えてくれる友人も現れました。

そのように中国人だけではなく、朝鮮留学生とも親しく交わりながら約1年の留学期間が終わろうとしていた矢先、1989年6月4日、天安門民主化闘争が起こりました。私の友人たちも多数傷つき、色んな国から来た留学生たちは次々と混乱した北京から帰国していきました。最後に残ったのが、日本人と、北朝鮮の学生たちでした。私は彼らとの交流も、もつと続けていきたかったので残ろうとしましたが、中国政府はそれを許さず強制送還となり、臨時便で帰国することになりました。今でも、急にバスに乗せられて連れで行かれる私たちとの別れを惜しんで、自転車でバスの後ろを叫びながら追いかけてくる北朝鮮の友人たちの姿が目には焼きついていきます。

4世の学童ケナリ(*1)クラブでボランティアしたりもしました。ここで、私は、韓国舞踊教室パラセク(*2)の存在を知ったのです。

私にとって、初めて出会い親しくすごした隣国の友人たちの母国語を学び続けること、隣国の伝統的な格闘技をやり続けることは、会えなくてもみんなとつながっていることを確認するための手段でした。その上、韓国舞踊をやることで、そのつながりをもっと太くなるような気がして、挑戦してみようとするが訪ねて行きました。いつか彼らと再会した時、中国語ではなく、朝鮮語で話し、テコンドも伝統舞踊もやっていたら、きつと喜んでもらえるだろうなあ、そういう交わりが友好の証しとして用いられたらいいなあ、これが、私が隣国の言葉や文化にこ

だわりつづけ、やりつづける原動力となつていくのです。

それから、韓国に日本語教師として派遣されたり、神学校で学び始めた後、もう一度韓国の神学大学院で学んだり、隣国に行ったり来たりする中で、テコンドは黒帯をとることができ、舞踊のための音楽、長短(チャンダン)を作り出す楽器であるチャンゴやカヤグムを習う機会にも恵まれました。また、たくさんの舞踊公演を見ることもできました。しかし、実際の舞踊の稽古は、時間と環境が許されずしばらく空白の時を持つてしまいました。

ある時、川崎のふれあい館パラセク(*2)と一緒に踊っていた方から手紙が届きました。「今、習っている先生のお弟子さんたちの発表会があるの。私もそこで、まだ続けているんですよ。良かったら見に来ませんか？」

と。何かに惹かれるように、その発表会に行き、衝撃を受けました。それは、習っている人たちがこれほど美しく表現できるのなら、先生はいったいどれほどの方だろうと。そして、その稽古は、ちょうど異動があった私の職場から都営線一本、とても行きやすい場所にあ



ることもわかりました。「また、できるかも。続けられるかも。もう一度挑戦してみよう。中途半端で終わらたくない」こんな思いがわきあがって来たのを覚えていました。その発表会が終わってからすぐに受付の方に「ぜひ、入りたいです」と息せき切つて伝えていました。こうして、私は、趙寿玉先生とチュムパンの皆さんに出会い、もう一度韓国舞踊を習う機会を得ることができたのです。

この発表会に誘ってくださった先輩に、そして、幡ヶ谷という地に先生が赴いて教えてくださっているという環境に、本当に感謝しています。

実際に習い始めて、感じていること、今の目標など、書きたいことはまだまだたくさんあります。また、機会をいただけたらぜひお話、したいと思えます。

(いしづか・たみこ…初級クラス) 編集部注

*1 ケナリ…連翹(れんぎょう)の謂。語源は英語のケナリー。日本式に発音するとカナリア。連翹の花がカナリアの羽のように鮮やかな黄色だったので、外人がケナリーと呼び、それが韓国式のケナリーと成つて定着した。

*2 パラセク…青色の謂。パラランが青い、sækが色という意味。

心躍らせるもの
〜珍島プクチュム・ワークショップに参加して〜

玲 纒

小鼓(ソゴ)に杖鼓(チャンゴ)、叩き、鳴らすことを無邪気に喜ぶ自分がある。本能的な部分のツボをぎゅつと押されている感じでも言おうか。

この夏は、その叩き、鳴らすことにとどまらず浸かれる機会に恵まれた。2015年7月18日から8月30日までの土日、祝日を使った計10回もの珍島(チンド)プクチュム・ワークショップ(WS)だ。講師は、韓国からお迎えした金玉星(キム・オクソン)先生である。珍島プクチュム。長さの違うチュエ(パチ)を両手に持ち、腰にくくりつけたプクを叩きながら踊る。WSの前に、ネット動画で珍島プクチュムの名手朴秉千(パク・ビョンチョン)先生の踊りを見てみた。力の抜けた、味わい深い名人芸に圧倒されると同時に、これからのWSが過酷なものになることを確



信じた。チャジンモリからクッコリ、再びチャジンモリを挟みクライマックスのトンサルプリへと、息つく間もなく進む7分ほどの間に三つのチャンダンの魅力がぎゅつしり詰まった作品である。女性が踊るということで、女性的なしつとりとした味付けもある。しかし、魅力はすなわち苦勞のタネにもなり、チャンダン云々の前に、そもそもチュエを持つ両手が不随意だった。リズムに心躍れど、体は踊れず。玉星先生も、これを10回で教えるのは大変なことだと早々におっしゃって、どうやって教えようかと公園で練つてから来られたときもあつたと聞く。褒め殺したり喝を入れながら、伴奏をして下さる杖鼓のクングルチュエ(キ)を折らなばかりの熱情で御指導いただき、10回目を迎えるころには、両手のチュエも僅かずつ手になじみ始め、無事エンディングの挨拶まで行き着くことができた。この未熟な身には過酷な作品であるにも関わらず、玉星先生の熱情に触れて、毎回本当に楽しくレッスンを受けることができた。

まず、口音(クウム*2)。初日、チャジンモリへのつけから四苦八苦していると、どこからか哀愁漂う音楽が聞こえてくる。と思つたら先生の口音だった。チャンダンがクッコリに移ると、いつしかそれは太平歌(テピョンガ*3)に変わっていた。リズムもいいが、メロディーもやつぱりいいなと聞き惚れた。

それから、観客を意識した踊りという視点で常に御説明をされたこと。休憩中の歓談でも、皆に対して「自分のことをプロだと思ふか」と突如質問をされ面食らつたが、プロか趣味かに関わりなく、踊るからには、いかに「見せるか」という意味であつたのかなと思ふ。

また、踊りの説明を脱線させながらの昔話や踊りの話も、言語の壁に阻まれてはいたが、興味深かつた。先生御自身、いろいろな先生に習われたそうだが、たくさんの道を通つてきて、そして今この道にたどり着いたというようなことを昔を振り返るようにおっしゃつたことが印象に残っている。あるときは、昔の写真を持つてきてくださったこともあつた。写真の中には韓国にいらしたころの寿玉先生の姿もあつた。私が何を分るわけでもないが、一つの道を突き

進んでこられたお二人の来し方に、ほんの少し思いを馳せた貴重な時間だった。

ワークショップが終わり、つらつら考える。新しい踊りを通して、教えてくださった先生が持つ世界に触れることができ、何と幸せであることかと。この出会いもまた心躍らせるものである。その幸せな気持ちとともに、自分のプクチュムを少しづつ少しづつ豊かなものにしていければと思う。

改めて、金玉星先生に感謝を申し上げる。先生のしなやかで柔らかな足運びは「黒ネコのタンゴ」(注:生でそのようなタンゴを見たことはない)を思わせ、見るのが毎回楽しみだったことを書き添えて。

そして、二回にわたり伴奏してくださった打縁琴(タヨングム)の皆様にも感謝を申し上げます。

(れいすい:幡ヶ谷教室 編集部注)

*1 クングルチュエ・チャンダンを叩くパチの内、先の方に樹脂などの重りがついているもの。右利きの人は左手に持つ。

*2 クウム・韓国式のスキャット

*3 太平歌(テピョンガ)・植民地時代に作られた新民謡。人生は春の日の夢のようなものだ、悩むことはないさ。気楽に生きて行こうと、いった内容が、元の歌詞。

活動報告

◎2015年8月22日(土) 14:00 開演

東京風流 韓国伝統音楽公演「打縁琴」出演

東京・日暮里 ARTCAFE百舌
主催:一般社団法人民族音楽院

◎2015年10月3日(土) 17:30開演

具本昌 写真展 オープニングイベント

主催:箱根・菜の花展示室

活動予定

◎2015年12月20日(日)

趙寿玉チュムパン おさらい会

東京・新宿区 笹笹地域センター
主催:趙寿玉チュムパンの会

◎2016年4月15日(金)及び16日(日)

趙寿玉 公演

東京・南青山 鏡仙会能楽堂

